



TITLE:

京大広報 No. 149

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 149. 京大広報 1977, 149: 706-711

ISSUE DATE:

1977-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209541>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 149

京都大学広報委員会



(理学部植物園遺跡で発掘された縄文時代後期の甕棺・配石遺構——関連記事本文2ページ)

目 次

<大学の動き>

- 次期総長に岡本道雄総長が再選…………… 2
- 埋蔵文化財研究センターの発足…………… 2
- 本年度医学教育等関係業務功労者として
堀口・山本両氏が表彰…………… 6

<随 想>

- すがすがしい敗戦
名誉教授 髭 坂 二 夫…………… 6

＜大学の動き＞

次期総長に岡本道雄総長が再選

現総長の任期満了（12月15日）に伴う次期総長候補者の選考が11月20日に行なわれ、その結果、岡本道雄現総長が再選された。

総長候補者の選考は、選挙資格者による選挙の結果に基づいて評議会で行なわれることになっており、選挙は11月14日（月）から11月19日（土）正午までの郵便による投票と、11月19日、20日の各部局ごとの投票所における投票とによって行なわれ、また開票は、薬学部記念講堂に設けられた開票所で行なわれた。

なお、選挙資格者は、第1次投票では2,507名、第2次投票以降では1,334名であった。

1 第1次投票

投票所における投票は、11月19日午後1時から同2時まで行なわれ、投票者数1,567名、所定期間内の郵便による投票者数94名、計1,661名であった。

この投票は、2名連記で、投票総数3,322票、うち有効投票3,054票、無効投票268票であり、次の16名が第1次総長候補者に選ばれた。

（注）

第1次総長候補者は、京都大学総長選考基準第12条第2項の規定により15名となっているが、末位に得票同数の者があったため、同選考基準第14条の規定により16名となった。

會田 雄次	西原 宏
井上 健	林 忠四郎
岡本 道雄	林 良平
河野 健二	林屋辰三郎
沢田 敏男	福井 謙一
菅原 努	溝畑 茂
杉村 敏正	本山 幸彦
高村 仁一	
中戸 莞二	（五十音順）

2 第2次投票

第2次投票は、11月20日午前9時から同10時まで、単記で、16名の第1次総長候補者について行なわれ、投票総数964票、うち有効投票961票、無効投票3票で次の3名が第2次総長候補者に選ばれた。

岡本 道雄
沢田 敏男

高村 仁一 （得票順）

3 第3次投票

第3次投票は、同日正午から午後1時まで、単記で、3名の第2次総長候補者について行なわれ、投票総数983票、うち有効投票969票、無効投票14票で、候補者別の得票数は次のとおりであった。

岡本 道雄	562票
高村 仁一	208票
沢田 敏男	199票

この結果、岡本道雄現総長が得票過半数で第3次総長候補者に選ばれた。

4 選考

評議会は、このあと同日午後2時30分から開催され、選挙の結果に基づき、次期総長候補者として岡本道雄現総長を選考し、同氏はこれを受諾した。

埋蔵文化財研究センターの発足

設立の趣旨

急速な高度成長に伴って派生するいろいろな問題のなかでも、公害とともに大きな社会問題となっているものに、埋蔵文化財の破壊がある。文化遺産をできるだけ保存することは、現代人の責務である。ただし、埋蔵文化財は無数にあり、その全てを破壊から守るということは、現実の問題として不可能である。とすれば、埋蔵文化財の実態に応じた保存対策を講ずべきであろう。そのためには、埋蔵文化財そのものの十分な調査・研究が先決となる。古代の遺跡・遺物の研究は、今日では、単に考古学一分野で処理できるものではない。人文科学・自然科学の諸分野との共同研究が最近進められつつあり、この種の研究機関は、本学のような組織内において、最も効果的に機能を発揮できる。すでに、国内において、埋蔵文化財問題がクローズアップされた当初から、この種機関の設立が強く要望されていた。

昭和47年、農学部の建設現場から縄文時代の石棒が発見されたのを機会に、京都市文化財保護課から大学へ注意があり、埋蔵文化財保存について、大学は世間の範となるよう対処してほしいという要望があった。そこで、大学は建築に伴う事前調査のため、新たに助手1名を文学部考古学教

室に配置して調査にあたらせる一方、遺跡保存調整委員会を設置して、建設と保存との調整をはかる組織をつくった。その後いろいろの経緯をへて、現在では学外組織の京都大学構内遺跡調査会（会長・藤岡謙二郎教養部教授）に事前調査が依頼されている。そしてそれとは別に、大学本来の研究や遺跡保存のための活動を充実させるため、本年7月5日、学内措置として本センターが発足した。

センターの組織と事業

センターには、センター長の下に研究部と事務室がある。現在、研究部には、主任をふくめ助手3名と、技術補佐員1名がおり、事務室には、事務官1名、技術補佐員1名がいる。もちろんこれだけでは不十分で、将来は、自然科学の分野をも加えた研究部門の充実が必要であろう。そして、センターの事業や管理運営に関する事項を審議するために、運営協議会があり、現在次の委員によって運営されている。

樋口隆康教授（文学部）（センター長）、池田次郎教授（理学部）、亀井節夫教授（理学部）、石田志朗助教授（理学部）、川上貢教授（工学部）、西川幸治教授（工学部）、上田正昭教授（教養部）、泉拓良助手（文学部）、篠沢公平事務局長、橋本正五施設部長

センターの事業内容は、遺跡調査と、研究成果のまとめとしての報告書作製、および遺跡の保存対策である。そのうちの調査には、構内遺跡の実態を明らかにする基本調査と、工事計画に伴う事前調査とがある。

文化財保護法によれば、「周知の遺跡」とよばれるものがあり、その地域での工事には、事前調査が義務づけられている。昭和52年度に京都市が作製した遺跡地図台帳によれば京大吉田地区総面積739,056㎡のうち約594,935㎡が「周知の遺跡」としてあげられている。しかし、かつては「周知の遺跡」ではなかった教養部や病院地区で遺跡が発見されており、京大吉田地区が平安京の一劃を占めることを思えば、未知の遺跡への考慮も必要である。さらに京大には全国各地に関連施設があり、その地下にさまざまな遺跡が眠っていることを予想しなければならない。

調査には試掘調査、立合調査、発掘調査の三段

階がある。センターの現在員では、試掘調査、発掘調査の実施は無理なので、これを、構内遺跡調査会に依頼している。昭和51年度には京大構内の埋蔵文化財の調査件数は試掘・立合調査を含めると28件、発掘調査面積は3,581㎡に達した。本年度においては、すでに発掘調査2件1,993㎡の調査が実施されている。

研究活動も同時に進められ、センター内で出土品の復原、整理ならびに関連資料の調査などが行なわれている。またそれらと並行して、理学部地質学鉱物学教室に構内地質の調査を依頼し、工学部建築学教室には構内における史跡の文献的考察を依頼しているほか、人骨の調査は理学部動物学教室へ、花粉分析は農学部林学教室へと、それぞれ依頼している。今後は遺物の年代測定や産地の同定、あるいは地形の復原などについても、関連教室への協力を要請するつもりである。本センター成立までの研究成果として、『京都大学構内遺跡調査研究年報（昭和51年度）』が刊行されている。

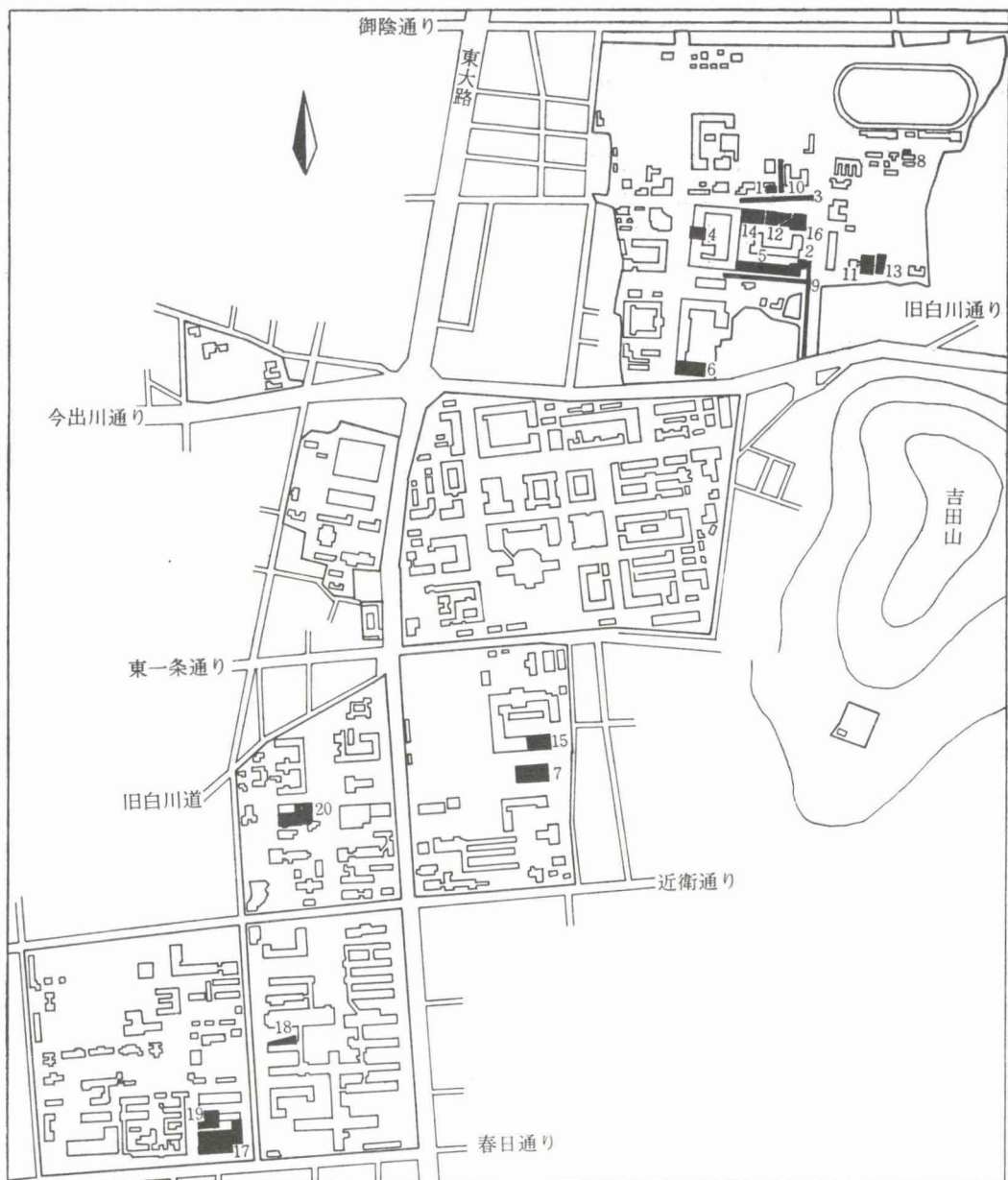
保存対策としては、理学部植物園遺跡で発掘された甕棺・配石遺構の移築保存を実施した（表紙写真参照）。この保存については、当時京都大学遺跡保存調整委員会において、現場保存と移築保存の両論が対立し、結局総長の決裁によって移築保存が決定され、原位置東方の森林内に復原された。同地点と農学部遺跡には遺跡の内容を説明した表示板をたて、一般への展示に供している。

構内遺跡の概要（第1図・第1表参照）

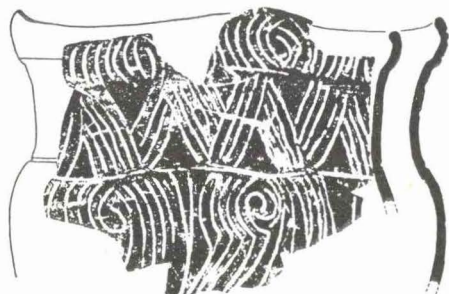
京都大学の構内には現在どのような埋蔵文化財が知られており、また、その存在が予想されるのであろうか。

(1) 北白川小倉町遺跡 人文科学研究所分館の建っている地区の東側は、縄文時代の前期と後期の大遺跡があったところである。昭和10年に調査され、大量の出土品を出したが、北白川一帯は縄文時代に開発された地域である。

(2) 北部構内 農学部農林生物学教室のある一帯は、大正13年に発掘され、縄文時代後期の土器や石器が出土した。この遺跡の範囲については、まだ確認されていないが、農学部本棟東側の調査でも、包含層が発見されており、理学部植物園一帯は、同時代の墓地が存在し、甕棺や配石遺構が発見された（表紙写真、第2図）。近畿以西



第1図 吉田地区で発掘調査された地点



第2図 縄文土器（縄文後期）

では稀有の資料である。

また、理学部本館付近には、追分地蔵遺跡があり、弥生前期の土器が発見されている。

基礎物理学研究所敷地や、グラウンド南側の農学部農薬研究施設では、平安時代の瓦が出土している。このあたりは、北白河殿、神楽岡、吉田寺、吉田葬送所、正法寺といった建物があったといわれている。

(3) 本部構内 工学部建築学教室周辺では、

(第1表) 京都大学構内遺跡発掘調査一覧表

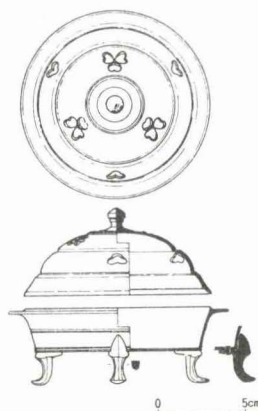
年 度	遺跡名	位 置	遺 物・遺 構	面積 (m ²)	年 度	遺跡名	位 置	遺 物・遺 構	面積 (m ²)
大正12年	農学部	1・2 農学部	縄文土器 石器他		昭和48年	植物園	11 理学部ノート バイオトロン 実験装置室	縄文土器他 甕棺・配石遺構	400
13年	農学部	農学部旧総合 館付近	石棒		49年	農学部	12 農学部総合館 北棟	縄文土器他	800
昭和9年	阿武山 古 墳	理学部附属阿 武山地震観測 所	玉飾枕 乾漆棺 遺体他		植物園	13 理学部ノート バイオトロン 実験装置室	甕棺・配石遺構 (移築保存)		
10年	北白川 小倉町	京大人文科学 研究所分館付 近	縄文土器 石器他		農学部	14 農学部総合館 北棟	縄文土器他	800	
31年	農学部	3 農学部総合館 北側道路	縄文土器		50年	教養部	15 教養部A号館	縄文土器 土師器 他	750
46年	農学部	4 農学部総合館 西棟	弥生土器		51年	農学部	16 農学部総合館 北棟	縄文土器他	850
47年	農学部	5 農学部総合館 南棟	石棒		病 院	17 医療技術短期 大学部校舎	土師器 瓦他 溝 井戸他	2200	
	大阪府 安 満 追 分 地 蔵	農学部附属高 槻農場	弥生土器 石器他 条理溝 (保存)	1500	和歌山 県瀬戸	理学部附属瀬 戸臨海実験所 宿舎	縄文土器他		
		6 理学部管理棟	縄文土器 弥生土 器他	600	病 院	18 病院R I 診療 棟	土師器 陶磁器他 溝 井戸他	220	
		教養部	7 教養部図書館		和歌山 県瀬戸	理学部附属瀬 戸臨海実験所 宿舎	縄文土器 須恵器 他 縄文墓 (人骨) 他	311	
48年	農学部	8 農学部ガラス 温室	瓦 土師器他 瓦溜 (埋戻し)		52年	病 院	19 医療技術短期 大学部校舎	土師器 陶磁器他 護岸跡溝井戸他	793
	農学部	9 農学部総合館 南側	縄文土器 土師器 他	600	医学部	20 医学部基礎医 学等研究棟	現在発掘調査中	1200	
	農学部	10 演習林本部西 側	縄文土器他	42					

平安初期の古瓦が発見されており、前述の吉田寺の疆域がこのあたりまで及んでいたとも考えられる。また幕末には、尾張藩吉田屋敷があったところである。

(4) 教養部構内 図書館およびA号館南翼の調査において、縄文時代後期と、弥生時代前期・中期の遺跡、および平安時代の古瓦が出土している。ここは吉田神社の旧地にあたり、その南隣の吉田寮と楽友会館の地は、鳥羽法皇の後である高陽院の御堂御所福勝院のあったところといわれている。

(5) 医学部・病院区・熊野寮区 この地区は、白河北殿、崇徳院御影堂、栗田宮などがあった場所として推定されており、医療技術短期大学部校舎建設予定地の調査では、白河北殿と同時代の遺跡・遺物が出土している(第3図)。

(6) 農学部附属高槻農場 この地区は、近畿における弥生時代



第3図 火舎香炉(平安後期)

の代表遺跡とされる安満遺跡の一劃にあたっている。この遺跡は、方形周溝墓、木棺、柱穴をはじめ豊富な出土品で知られる屈指の遺跡である。

(7) 理学部附属阿武山地震観測所 この敷地の最高所は、阿武山古墳として知られる終末期古墳の存在するところである。昭和9年に発見され、漆喰を塗った石室の内に安置された乾漆棺のなかに玉飾の枕をした60才前後の貴人の遺体が完全な形で残っていた。一説には藤原鎌足の墓ではないかといわれ、元の通りに埋蔵された。現在でも地元民の信仰が厚い。

(8) 理学部附属瀬戸臨海実験所 和歌山県白浜にある。同構内からは縄文土器、石棒、弥生土器、須恵器、製塩土器などが発見されており、昭和51年度の発掘では縄文時代晩期の人骨が出土した。



以上は近畿地区で現在知られているものに限ったが、本学の用地は全国的にひろがっており、それらについても関連資料の確認が要望されている。関係部局に情報の提供をお願いするとともに、遺跡保存と建設とを両立させるよう努力するつもりである。

(埋蔵文化財研究センター)

